

# 保育の視点から見た「子どもの保健Ⅱ」の授業内容

— 保育者と学生のアンケート結果から —

森 本 美 佐

奈良文化女子短期大学

## The Course Contents of “Child Health Practice” for Childcare Training: From the Results of the Questionnaire to Childcare Workers and Students

Misa Morimoto

*Narabunka Women's college*

保育士養成課程の改正が行われ、従来の保育士資格必修の「小児保健」「小児保健実習」が「子どもの保健」「子どもの保健Ⅱ」に変更された。これを機に、保育の視点から「子どもの保健Ⅱ」の授業のあり方を検討していきたいと思い調査を実施した。その結果、学生と保育者が必要と感じている実技演習の項目に大きな差異はなかった。その中でも、学生は身の回りの世話をはじめとする「養護技術」に、保育者は「応急手当」により強く必要性を感じていた。両者ともに、「冷罨法」「温罨法」の必要性の認識は低かった。必要性の認識が低い項目や、高くても学内実技では難しい「食事介助」や「トイレ介助」などの項目に関しては、視覚的に訴えイメージできるような学習を行うこと、現在行っている他の演習項目は継続し、その上で学生が安全や安楽について考えて行動できるよう復習を重視した学習が必要であることが示唆された。

キーワード：保育者教育、保育の視点、子どもの保健Ⅱ、実技演習内容

## 1. はじめに

平成22年に厚生労働省による保育士養成課程の見直しが行われ、これまでの「小児保健」「小児保健実習」が、講義科目としての「子どもの保健」と、演習科目としての「子どもの保健Ⅱ」に変更され、平成23年度の入学生から施行されている。また「子ども・子育て関連3法案」が審議され、地域子ども・子育て支援事業など多様な需要に応える保育事業が推進され、保育者には施設型保育だけでなく、地域に向けた役割拡大が求められている。

このような状況の中、「子どもの保健」や「子どもの保健Ⅱ」について考えるとき、単に医学や看護

---

森本 美佐 〒631-8523 奈良市中登美ヶ丘3-15-1 奈良文化女子短期大学

の延長線として捉えるのではなく、子どもが日常生活の中で健康な体と健全な心を持って発育していくために、保育の実践者として何を学ぶべきかを考えることが大切である。しかしながら本学では、これらの教科目を看護職である筆者が担当しており、看護が専門の教員であるが故に、医学や看護の視点で捉えた授業内容を展開している傾向がある。特に「子どもの保健Ⅱ」の実技演習では、看護の立場から見ると全ての項目が必要であり、どの項目を抽出してどの程度まで実技として押さえていけばよいのか把握できていない状況であった。保育者への先行研究も少数で、上山<sup>1)</sup>らが「健康観察、応急処置、オムツ交換や抱き方などの健康な子どもへの生活援助の項目の必要性」を述べているものの、テキストにより内容の差があり、限られた時間の中で何をどのように実技として押さえるかは模索段階であった。

そこで、今回「子どもの保健Ⅱ」の授業内容を保育の視点から見直すことを目的とし、保育者及び学生に調査を実施した。その結果、実技として行っておくべきことは何か今後の方針性について若干の示唆を得たので報告する。

## 2. 「子どもの保健Ⅱ」の概要

### 2.1 要件、実施期

保育士必修科目であり、2年次の前期に実施する。1年次後期に90時間ずつの保育実習、幼稚園実習は終了している。2年次前期の「子どもの保健Ⅱ」の履修途中に保育実習、および履修終了後に幼稚園実習が入る。

### 2.2 科目概要

「子どもの保健」での学習をもとに、保育者として子どもと関わる現場（幼稚園や保育園など）で、子どもの発育発達に対する心のこもった養護ができるよう技術を習得する。また、子どもの健康状態を観察・評価し、病気や事故・けがの対応や予防が速やかに実践できる技術を習得する。

### 2.3 実技内容項目（平成23年度）

- ① 身体の計測、健康観察：頭囲・胸囲測定、体温・脈拍・呼吸測定、検便
- ② 養護技術：調乳・授乳、抱き方、沐浴、衣服の着脱、オムツ交換、歯磨き、手洗い
- ③ 応急手当：心肺蘇生、骨折処置、異物除去、温罨法、冷罨法

なお、平成23年度の学生は、旧カリキュラムの「小児保健実習」として履修している。

## 3. 研究目的

「小児保健実習」の実技内容が、学生にとって保育現場で有意義に活用されたのか実態を知る。また保育者の立場から実技の必要性があると考えられる項目を調査し、保育の視点から「子どもの保健Ⅱ」に求

められる授業内容を明らかにする。

## 4. 研究方法

### 4.1 調査対象者

学生は、本学幼児教育学科2回生40名であり、39名から回答が得られた。保育者は、奈良県内の実習施設である4カ所の保育園・幼稚園の保育者54名で、内訳は保育士31名、幼稚園教諭23名である。

### 4.2 調査期間と方法

学生に対しては、「小児保健実習」の履修が終了し、9月の幼稚園実習が終了した時点で、質問紙による留め置き調査を実施した。調査内容は、幼稚園・保育園で実施した項目と、実技の必要性を感じる項目である。

保育者には、園長にアンケートの趣旨を伝え、20XX年12月の時点で保育者に質問紙を配布・収集して貰い、郵送にて返却して貰った。学生と同様に実技の必要性を感じる項目について調査した。

### 4.3 分析方法

実技の必要性については、「かなり必要」「必要」「余り必要ない」「全く必要ない」の順位尺度で表し、それぞれ単純集計で比較した。また、順位和検定（Mann-WhitneyのU検定、以後U検定と略す）を行い、学生と保育者、幼稚園教諭と保育士の意識の差をみた。

### 4.4 倫理的配慮

調査対象者には、調査の趣旨、調査への回答は自由であること、調査票は厳重に保管し統計的に処理が成されること、調査以外での使用はなく、調査票は集計が済み次第裁断破棄し外部に漏れることがないことを口頭及び文書にて説明し、調査への協力を依頼した。学生に対しては、成績には一切影響しないことも追加説明した。調査票の回収を持って、同意を得たものとした。

## 5. 研究結果

### 5.1 学生へのアンケート結果

#### 5.1.1 実習で実施した項目

図1は保育園・幼稚園で実施体験した項目である。保育園・助や「衣服着脱介助」が多かった。保育園での実習では、「抱っ交換」も7割以上実施していた。全体的に幼稚園実習では、保少なかった。学内で実技演習をしている「脈拍・呼吸測定」「検

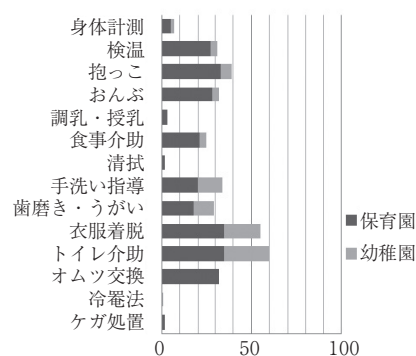


図1 実施項目 (n=39)

便」「沐浴」「温罨法」「心肺蘇生」「異物除去」「骨折処置」の項目の実施はなく、「冷罨法」「調乳・授乳」および「身体計測」も少なかった。

### 5.1.2 学内実技演習の必要性

図2は、平成23年度に実施した学内実技演習項目について、学生がどの程度必要と感じているかを表したものである。「冷罨法」と「温罨法」を除く全ての項目で、80%以上の学生が必要を感じていた。その中でも、「オムツ交換」「抱き方」「心肺蘇生」は70%以上の学生が「かなり必要」と答えていた。「体温測定」「抱き方」「衣服着脱」については、「必要がない」と答えた学生はいなかった。

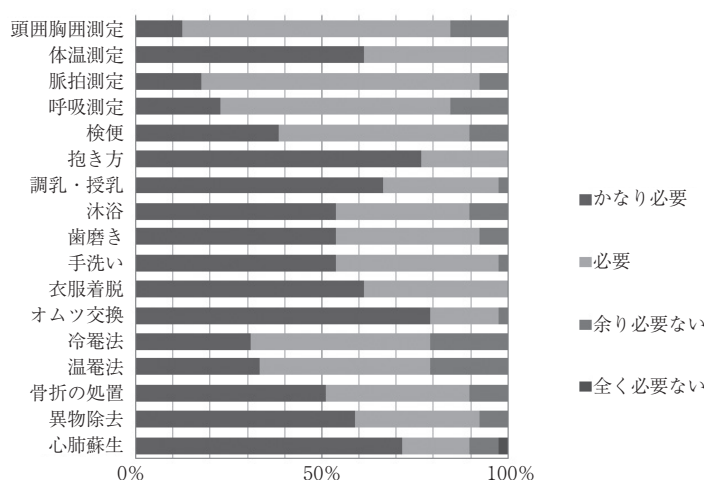


図2 学内実技演習の必要性 (n=39)

次に、今後学内で実技演習を追加した方がよいと考える項目をあげてもらった。図3のような項目が上がり、「傷の処置」「病気の対応」「異常時対応」は半数以上の学生が答えていた。その具体的な内容は、「止血法」「けいれん時の対応」「発熱時の対応」「嘔吐時の対応」が多かった。

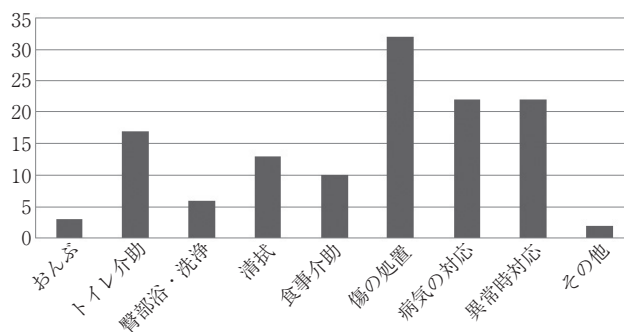


図3 追加希望項目 (n=39)

### 5.2 保育者へのアンケート結果

保育者に対しては、学内実技演習を実施している項目だけでなく、学生が追加希望をしている項目も加えて順位尺度で必要性を尋ねた。更に実技演習項目の追加希望を問うたが、新たな項目は上がらなかった。

図4・図5は、保育士及び幼稚園教諭が感じている必要性を表したものである。「歯磨き」「手洗い」「骨折の処置」を除く全ての項目で保育士の方が必要性を感じており、保育士は全項目で必要と答えた者が半数以上を占め、「抱き方」「オムツ交換」「傷の処置」「異常急変時対応」「病気対応」「異物除去」「心

肺蘇生」では、全ての保育士が必要と答えていた。「傷の処置」や「異常急変時対応」などの応急手当は幼稚園教諭でも9割以上の者が必要性を感じていた。他に両者ともに高かったのは「手洗い」で90%以上の者が必要と答えていた。又応急手当や「手洗い」では、幼稚園教諭の半数以上が「かなり必要」と答えていた。それに対し、「頭囲・胸囲測定」「呼吸測定」「検便」「おんぶ」「臀部浴・陰部洗浄」では、幼稚園教諭の約半数が必要性を感じていなかった。

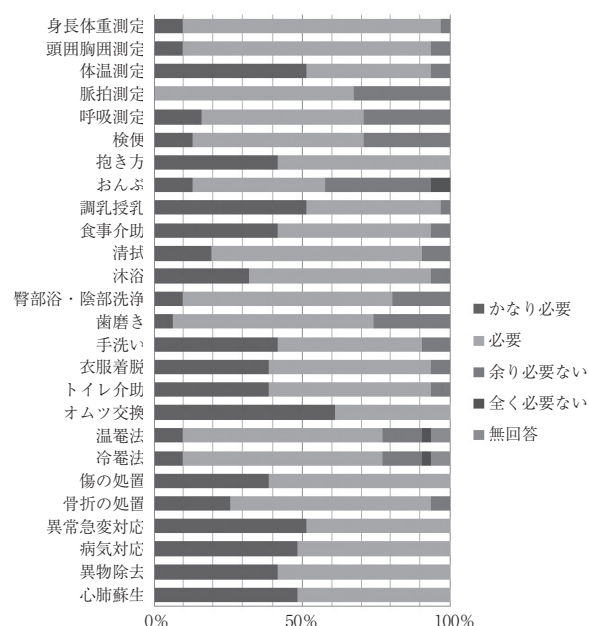


図4 保育士が感じる必要性 (n=31)

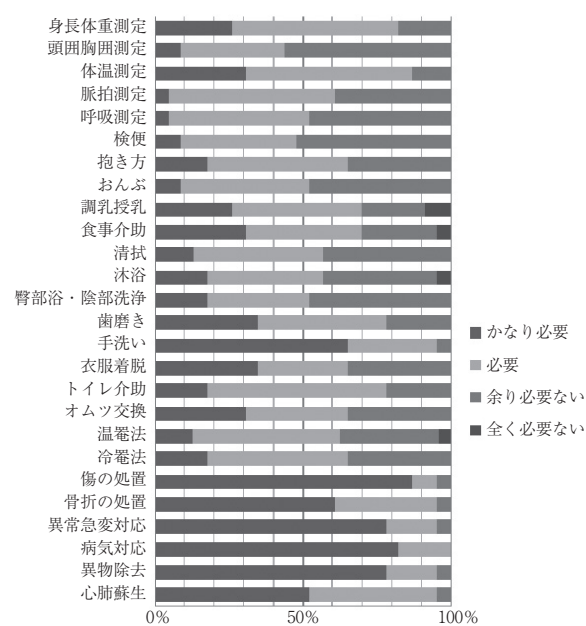


図5 幼稚園教諭が感じる必要性 (n=23)

保育士と幼稚園教諭をU検定でみると、保育士が必要性を強く感じていた「頭囲・胸囲測定」「抱き方」「調乳・授乳」「沐浴」「オムツ交換」の項目で1%水準、「清拭」は5%水準で有意差がみられた。幼稚園教諭の方が高かった項目では、「傷の処置」が1%水準、「骨折時の処置」では5%水準で有意差がみられた。

「病気対応」の具体例では、「嘔吐時」「発熱時」が多く、「病後登園」という意見も見られた。「異常急変時の対応」では「けいれん時」「アレルギー反応」が多かった。また「AEDの使用方法」「救急車の呼び方」という意見も見られた。両者の差はなかった。

実技演習は必要ではないが、講義で押さえてほしいという項目は、「何かあったときの保護者への対応」「観察したことの記録の仕方」「感染症対策」「虫さされ処置」「打撲やケガの程度判別と処置」であった。

### 5.3 保育者と学生の比較

保育士と幼稚園教諭を合わせた保育者と、学生が感じている必要性を比較すると、両者ともに「温罨法」「冷罨法」が低く、他の項目に関しては、項目により差はあるものの両者ともある程度の必要性は感じていた。具体的には「心肺蘇生」「異物除去」「骨折の処置」の3項目を除き、全ての項目で学生の方が必要性を強く感じていた。U検定にて比較してみたところ、「脈拍測定」「検便」「抱き方」「調乳・授乳」



「沐浴」「歯磨き」「衣服着脱」「オムツ交換」の項目で1%水準、「体温測定」では5%水準で有意差があった。

## 6. 考察

### 6.1 学生の実技演習に対する必要性の認識

今回の調査で学生が保育実習や幼稚園実習で実施した項目は、沼野<sup>2)</sup>の調査とほぼ同様であった。保育園・幼稚園とも身のまわりの世話が殆どであり、「衣服着脱」や「トイレ介助」が多かった。保育園に比べ幼稚園で実施した項目は少なく、これは対象とする年齢が3歳児以上であることから介助の必要性が無く、実習内容が身のまわりの世話よりは手遊びや絵本など教育的な保育内容が多くなっているためだと思われる。「手洗い指導」や「歯磨き・うがい指導」は感染予防のためにも大事な指導であるが、両者とも半数に満たなかったのは、実習時期が7月以降であり、園内での生活習慣として既に身に付けられているからではないだろうか。また「検温」は幼稚園では少数であるが、保育園では7割の学生が実施している。これは3歳未満の乳幼児は、体温調節が未熟であるために、少しの環境の変化でも発熱すること、また病後児を保育することも多いからだと思われる。

「おんぶ」「食事介助」「トイレ介助」は学内で実技演習を行っていないが、「困った」という意見は聞かれなかった。他の実施項目は学内実技で網羅されており、「オムツ交換」や「衣服の着脱」は「学内で実施していたために、戸惑わず行えた。」という意見が多く聞かれ、学内での実技演習はある程度活用されていると考える。

学内実技演習を実施している項目の中で殆どの学生が必要を感じている項目は、「体温測定」「抱き方」「衣服着脱」「オムツ交換」「心肺蘇生」であった。「心肺蘇生」を除く項目は、実習での実施体験が多かった項目である。次いで多かった「調乳・授乳」「手洗い」は保育現場の中では子どもの健やかな育ちを促す大事な援助であり、実施体験は少なくとも現場での実践頻度が高いと認識している項目に対して、学生も必要性を感じていることが伺える。これは貞岡<sup>3)</sup>らの調査と同様の結果であった。

「心肺蘇生」や9割以上が必要を感じていた「異物除去」、又追加希望項目で多かった「傷の処置」「病気の対応」「異常時対応」は、実習内でのヒヤリハット体験などから、突然何かが起こった場合の対処方法として知識や技術を身に付けておかなければならないと感じ、必要性が高くなっているものと考えられる。それに比べ、「冷罎法」「温罎法」の必要性の認識は、「かなり必要」「必要」を合わせて80%未満であり、他の項目に比べ低い。前述の貞岡らの調査では、さらに低く20%以下となっている。実習での実施体験のみならず、簡単な冷却シートなどの普及により見学体験も少ないために低くなっているものと思われる。

### 6.2 保育者の実技演習に対する必要性の認識

身体測定では、保育士と幼稚園教諭には大きな差があった。保育園では身体測定が毎月定期的に行われており、3歳未満の乳幼児の発育の指標や、時には異常の早期発見となるために重要な項目と考えられているのではないかと。それに対し幼稚園では入園時から既に子どもの個人差があり、必ずしも正常や

異常を知るために必要性が高いとは認識されていないのではないかと考える。

健康状態の観察では、「体温測定」は両者とも必要と答えている者が多いが、他は少ない。体温調節が未熟な乳幼児は発熱しやすく、感染症の罹患に関しても異常の早期発見の目安となることから必要性が高かったと考えられる。同じく健康状態の観察の指標となる「脈拍測定」や「呼吸測定」が低いのは、体温測定に比べて測定の仕方が難しく正確性も問題視されていることや、発熱のような目に見えた大きな差が見極められないためではないだろうか。しかしながら保育者には一般向けの心肺蘇生法ではなく、子どもの1次救命処置が推奨されており、その中でも呼吸の観察と動脈拍動の確認が詠われていることから、必要性は高いと考える。

身のまわりの世話に関する養護技術では、有意差の有無にかかわらず保育士の方が必要性を強く感じている。これは保育時間も長く、健やかな育ちのために食や排泄などの日常生活援助の必要性を強く感じているものと思われる。しかし「おんぶ」は保育士であっても4割以上が必要ないと答えている。これは、乳児では時々行われてはいても、抱っことは違い、顔を見ることができず、安全性の問題があるからではないかと考える。

「歯磨き」や「手洗い指導」は幼稚園教諭の方が必要性を感じていた。これらの項目は清潔や感染予防の観点から必要な項目であると同時に教育的側面があり、幼稚園教諭の方が高くなっているものと思われる。

応急手当では「温罨法」「冷罨法」が両者ともに低かった。前述の上山らの調査でも同様の結果であり、簡便性に優れている冷却シート等の普及により従来からの罨法が行われておらず低いものと考えられる。しかしながら、熱中症などの応急手当の一つの方法として大事な項目であり、学習の必要性は高いと考える。他の応急手当の項目では、全て幼稚園教諭の方が保育士より高かった。幼稚園では年齢が高いことから外遊びの機会も多く、ヒヤリハット場面に遭遇したりケガなどに対応したりしなければならず、実技演習の必要性を強く感じているものと思われる。具体的には「嘔吐」「発熱」などが上がり、感染症に罹患しやすい子どもの主症状として対応することも多く、対処方法だけでなく幅広い知識の必要性も強く感じているためと思われる。「けいれん時」「アレルギー反応」も多く、熱性けいれんやてんかん、食物アレルギーを持っている子ども達も多くなり、発作的に起こった場合の観察や安全確保等の対処が保育者にも求められるようになってきたためと考える。講義で押さえてほしいという項目も、「虫さされ処置」や「感染症対策」など応急手当や病気対応に関する項目が多く上がっていたことから必要性を強く感じていることが伺える。

### 6.3 学生と保育者の認識の比較

両者ともに必要と感じている項目に差はなかった。学生が保育者より養護技術の必要性を強く感じていたのは、現場で実施されることが多く、技術としてしっかりと身に付けなくてはならないと実感したためであると思われる。それに対し保育者は、応急手当の項目が高い。身のまわりの世話などの養護技術は経験を重ねることにより身に付けることができるが、応急手当の知識技術は、突発的に起こった場面に対してどのように対応するかが問われており、子ども達の命を守る保育者としての責務を感じ、必要と答えた者が多くなったのではないかと考える。

## 7. 「子どもの保健Ⅱ」の授業内容の検討

今回の調査で「小児保健実習」で行っていた実技演習内容が大きく保育の視点からかけ離れていることはなかったことが判明した。しかしながら今回明らかになった必要性のある項目について、45時間という限られた時間の中で学生が実践的理解を得るためには授業内容及び方法の検討が必要である。また、この授業は演習科目として位置づけされており、講義科目との違いを明確にしていかなければならない。

生活体験が乏しく、少子化傾向から実際に子どもとふれあう機会が少ない学生にとって、養護技術は未知なるものである。実際に学内で演習をしても、人形であっても手が出せずに戸惑う学生も珍しくない。そこで現在行っている演習項目は継続し、その上で学生が安全や安楽について考えて行動できるよう復習を重視した学習が必要であると考え。「トイレ介助」や「食事介助」は学内演習の実施は難しいが、視聴覚に訴えるDVD学習を効果的に行っていきたい。「手洗い」については保育者の必要性の認識がかなり高く、「歯磨き」も含めて清潔的な援助という視点からだけでなく、病気予防の教育的観点から子どもや保護者への指導方法につなげていけるような発展的な学習を考えていく。

身体測定や健康観察については、成長発達や健康状態の把握、病気の早期発見のためにも大事な項目である。「身長・体重測定」を追加し、保育者の認識が低い「脈拍測定」などの項目に関しても継続して実施していき、保健や健康に対する学生自身の意識を高めていきたい。

応急手当について、必要性が高い「心肺蘇生」や「異物除去」等の項目は今まで通り実施する。「ケガや骨折などの処置」も必要性が高く、より学生が理解しやすいように基本的な技術は講義で説明し、その後具体例を出しながら学生に考えさせる演習を行いたい。電法に関しては、保育者・学生ともに必要性の認識が低い、病気や異常時に簡便なシートがなければ何もできないと言えないように物品の使用方法の見学をする。また、事故防止や病気の予防的な観点から、嘔吐時の処置や保育環境の調整などの実技演習を、実験を取り入れるなど発見学習ができる様な方法を考えながら取り入れていきたい。

## 8. まとめ

今回の調査で、以下のことが示唆された。

- ①「小児保健実習」で行っていた実技演習内容は、保育の視点からかけ離れていることはなく、保育実習でも活用されていた。
- ②学生と保育者が、実技演習が必要と感じている項目の差異はなかった。応急手当については保育者の方が、身体計測や健康観察、養護技術については学生の方が強く必要性を感じていた。
- ③学生・保育者ともに、「冷電法」「温電法」の必要性の認識は低かった。
- ④保育士と幼稚園教諭の必要性の認識を比較してみると、応急手当については幼稚園教諭が、身体計



測や健康観察、養護技術については保育士の方が強く必要性を感じていた。

- ⑤今回必要性の認識が低かった項目や、高くても学内実技では難しい項目に関しては、視覚的に訴える学習を行いイメージできるようにする。他の現在行っている演習項目は継続し、その上で学生が安全や安楽について考えて行動できるよう復習を重視した学習が必要であると考え。

## 9. おわりに

今回は、実技演習項目の必要性の調査による授業内容の検討に留まった。しかしながら演習科目であるこの教科は、理論を学ぶ「講義」と現場における実践や応用を学ぶ「実習」をつなぐ役割としても重要であり、理論と実践の相乗効果を考えた演習科目としての全般的な授業検討が必要であると考え。筆者は「子どもの保健」も担当していることから、講義と演習の繋がりを意識した内容構成や、実習が効果的に進められていくための履修時期も含めた授業検討も必要ではないだろうか。同時に、子どもと接することが少なくなった学生達が、子どもに親しみを感じながら子どもの豊かな育ちを守れる心のこもった技術が習得できるよう授業方法の検討を行っていききたい。

### 引用文献

- 1) 上山和子・貞岡美伸・福原博子・岡宏美（2004）「小児保健実習」の授業内容の評価―保育者の視点からの考察―。新見公立短期大学紀要。第25巻：161-169.
- 2) 沼野みえ子（2010）「乳児保育」「小児保健実習」授業の実施時期について―教育実習、保育実習との関連から適切な時期を考える―。新潟青陵大学短期大学部研究報告。第40号：147-155.
- 3) 貞岡美伸・上山和子・福原博子・岡宏美（2004）「小児保健実習」の授業に関する調査―学生の保育実習後の認識―。新見公立短期大学紀要。第25巻：179-186.

### 参考文献

- 高内雅子編著（2011）子どもの保健演習ガイド。建ぱく社.
- 高内雅子編著（2001）保育のための小児保健。保育出版社.
- 七木田方美・湯原富子（2007）保育学生の「保健・健康」への意識を高め、保健・健康指導を工夫するための考察―保育者への「保健・健康」に関するアンケート調査より―。比治山大学短期大学部紀要。第42号：35-41.

